

西南学院高等学校の国際交流の歩み

鶴身 淳一郎

◇初めに

西南学院高等学校が1980年代の初め、国際交流に着手して約30年が過ぎた。当時、このような事業に取り組む高校は公立にも、私立にもあまりなかった。現在ではその多くが当然のように国際化を口にするが、30年前、国際化は未知の領域であった。1980年代に日本政府が「ゆとり教育」を打ち出し、それに沿うように、日本人の海外進出が盛んになった。だが、福岡市内や近郊で国際交流に携わる高校はあまりなかった。従って、西南は国際化に関しては先駆者と呼んで差し支えないのではなかろうか。

本校の国際交流は、いわゆる、コマーシャリズムに乗った海外渡航と違って、西南独自の、しかも建学の精神に沿うことが前提であった。それゆえ、ただ漠然と海外旅行するのではなく、いつ、どこで、何のために、何を研修するか、慎重な考慮が求められた。経済的に裕福な家庭の子弟を物見遊山的に派遣する考えは委員会や職員会議で排除された。

国際交流委員会、運営委員会、そして職員会議を経て決定された基本的な事項は以下の通りであった。

〈目 的〉

①米国南部の住民がキリスト教信仰を基盤にして営む生活や文化・伝統をホームステイを通じて学ぶ。研修中はキリスト者との生活で信仰がどのように息づいているか体感させる。②異文化習得にとどまらず、自己啓発をも目指す。異文化体験を通じ、新たな自己を発見する。新たな自己に目覚め、成長を遂げて、他者との平和的共存を目指させる。聖書が語る「世の光、地の塩」に少しでも近づくように導く。

〈研修地〉

米国南部。本校が米国南部バプテスト連盟によって派遣された宣教師 C.K. ドージャー師によって開学されたことが主たる所以。西南のルーツを知る上でも適切だと考えられた。

〈時 期〉

毎年3月に2週間程度。当初、3月初めの卒業式後から春季休暇に行われる補習まで生徒達は休みが与えられたので、初旬から下旬までの約2週間で研修に充てた。補習は現在行われている春季特別授業とは違い、正課の延長ではなく、研修を終え帰国した生徒はそれに参加できた。また、この時期、旅費が比較的安く、現地校での体験入学も可能であった。

〈引率者〉

本校教師が全行程を引率。業者はホームステイの期間を除き、見学時の航空機、列車、バス、ホテルの手配だけに関わった。これは旅費の高騰を抑えるだけでなく、コマチャリズムに乗ることを極力避ける意図からだった。引率教員は2名から4名。生徒10名の1班に対して教員1名があたる4班が構成された。残念ながら、引率可能な教員4名の確保は校務のため、2回目から難しくなり、減少した。研修団長は英語科教員とした。

〈募 集〉

募集人数40名。これに深い理由はなかった。ホームステイ中に引き受け教会から用意された移動用バスの座席数が40だったからだ。

交流委員会が用意した研修要項と旅程表を職員会に提示、承認された後、募集した。最初、観光を全く排除して研修に限る考えが大勢を占めたが、最終的に、ホームステイ前後に西海岸に位置するロサンゼルス、サンフランシスコや西北部に位置するグランドキャニオンやモニュメントバレー、メキシコ国境の町ティファナの見学を含める事に決定。旅程がどれほど生徒や保護者の関心を引き出すかわからなかったので、行程に「色」を添えた。すると、驚いたことに、150名以上の応募があった。選抜には記述テスト（英語）と面接を行った。

〈事前研修〉

研修生には約半年の事前研修を課した。週2回、放課後に英会話練習、南部の歴史文化研究を行わせた。出発直前には、テーブルマナー、バスルームマナー、その他生活一般に関する行儀作法が指導された。

◇研修実施

第1回訪米：1982年3月実施。研修地はテキサス州ダラス郊外の小都市タイラー。受け入れ教会はグリーン・エーカーズバプテスト教会。タイラーは、当時、本校で宣教師をされていたシャーウッド・マフェット師の故郷であった。ちょうど1年の休暇を過ごされていた師は快く現地でのコーディネーター役を引き受けてくださり、受け入れ家族選定やホームステイ中の一切の世話をしてくださった。引率教員は4名。英語科3名、社会科1名で、団長は国際交流委員長の内海敬三教諭であった。

福岡を出た一行はソウル経由でロサンゼルス着後、国内線に乗り換え、ダラスに向かった。ダラスフォートワース空港にはマフェット先生とホストファミリーが何人か出迎えに来られていた。タイラーには教会バスで移動。教会到着後、ファミリーと対面。その際に生徒達の間流れた不安と期待の入り混じった雰囲気は今でも忘れられない。「俺達、この先、どうなるのかいな!？」という声が今でも聞こえそう。それからの約1週間は生徒にとって冒険の日々だったに違いない。我々4名も二手に分かれてホームステイを行った。教員も緊張と不安を持った。しかし、新たな環境に慣れるにつれて、困難な事よりも楽しい事が支配的になった。ホームステイ終了後、次の訪問地に向かう朝、本校生とホストファミリーが涙を流し、別れを惜しんだので、バスに乗り込むのに相当の時間を要した。これで、米国人と本校生との交流が大いに弾んだのが容易に分かった。タイラーでの体験があまりに良かったのであろう、生徒



第1回訪米研修

達は残りの旅程に予想したほど興味を示さなかった。タイラーを出た一行は西部の乾燥地帯に見られるピュートやメサと呼ばれるモニュメントバレーとグランドキャニオンを訪れた。飛行機とバスを乗り継いで、砂漠の闇を突いて宿舎到着。翌朝ホテルの窓から見えた土の赤さに驚いた。それからの2日間、今にも西部劇のシーンが出現してもおかしくない辺りを散策した。その後ロサンゼルスに戻って、ディズニールランドを楽しんだ。旅の終わりにホノルルでのバプテストアカデミー校の生徒との交歓をして、自然と人の温かさを満喫して福岡に戻った。

第2回訪米：1983年春3月、ルイジアナ州バトンルージュ市で実施。引率は2名、参加生徒40名。団長内海敬三教諭。

本校で短期宣教師として2年間教鞭をとられたサム A. ボッグズ師の肝煎りで、同市の第一バプテスト教会が本校生徒を引き受けてくださった。滞在中、教会役員の一人であったケン・スニード師が一切を取り仕切ってくださいました。バトンルージュ市で現地高校に体験入学をした。また、広大な敷地を持つルイジアナ州立大学で教会の青少年とスポーツをして一日楽しんだ。ホームステイ終了後、グランドキャニオンを見学、シアトル経由で帰福。残念ながらバトンルージュは第9回（1990年）の研修を最後に研修ができなくなった。後に日本人留学生在が当地でハロウィンの際、強盗と間違われて射殺される事件が発生して、危険な都市として敬遠された。

第3回訪米：1984年春3月、テキサス州ダラスに於いて実施。引率3名。団長吉村利幸教諭。受け入れ教会はダルロック・バプテスト教会。本校で長い間宣教師として奉仕されたチャーリー・フェナー師がコーディネーター役を務めてくださった。師はこの先本校の研修旅行に多大の援助を与えてくださった。

第4回訪米：1985年8月、ミズーリ州セントルイス市から車で1時間ほど行った町マウンティンビューとエミネンスで実施した。2つの町に分かれたのはホストファミリーの数が1つの町では不足したからだった。二つの町はとりにあるので連絡がとりやすかった。両町のバプテスト教会が本校生徒を引き受けてくださった。生徒40名、引率3名、団長鶴身淳一郎。滞在中、全てを仕切ってくださいしたのはチャールズ・カントレル氏と奥さんの幸子さん。ご主人のチャールズさんは本学の前交換留学生であり、卒業後に、法曹界に進まれ、巡回弁護士をされていた。1、2度、氏に同行して法廷でのやりとりを傍聴し、監獄も見学させてもらった。奥さんの幸さんは本学文学部の卒業生で、宣教師の先生方の助手を長年されていた。小さな町でのホームステ

イというので生徒が退屈するのが心配されたが、杞憂に終わった。現地のホストブラザーやシスターと大自然を満喫して交流を重ねた。研修地に入る前にシカゴでシアーズタワーに上り、博物館で作品鑑賞。カナダではトロント市内見学後、ナイアガラ瀑布を訪れたが、落下する水量の多さに度肝を抜かれた。また、セントルイス市のプッシュ球場で野球観戦（カーディナルズ対フィリーズ）した。

第5回訪米：1986年3月、第3回と同じテキサス州ダラス。引率3名、団長内海敬三教諭。全行程を20日に延長、ホームステイも2週間に延ばした。

第6回訪米：1987年、第2回と同じルイジアナ州バトンルージュが研修地。引率3名、団長内海敬三教諭。実施期間は3月15日から4月3日。この時期から春季特別授業の関係で実施時期が繰り下がる。

第7回訪米：1988年3月15日から20日間の研修で、ホームステイ2週間。研修地はバージニア州リッチモンド市。引き受け教会はダービーシャイヤー・バプテスト教会。同教会主任牧師のコーブランド師（本学院のコーブランド元院長と血縁関係にはないが、師弟関係にある）とハティ夫人が我々教員に家族同様の扱いをしてくださった。同教会の青少年の指導にあたっておられたデイヴィッド・フライヤー牧師も手厚く本校生を指導された。

リッチモンド市には南部バプテスト連盟本部が置かれ、見学の機会に恵まれた。この地方には建国の礎となる場所が点在、その一つに数えられるウイリアムズバーグに立ち寄った。ここは米国の古都とよばれ、開拓時代の生活様式を残す。当時、全国にメガチャーチと呼ばれる超大教会の進出が目されていたが、ダービーシャイヤー教会はその一つではなかった。それ故か、教会員が非常に親しみを込めて接して下さった。会員の1人は本学院元院長エドウィン B. ドージャー先生夫人であり、教会の近隣に建つ退役宣教師のための病院兼マンションにお住まいであった。我々教員は奥様宅にお邪魔し、暫く昔話に花を咲かせた。

毎回の応募者数が定員数を遥かに超えたので、研修グループを増やす声が上がった。新たな訪米研修団を派遣する案があったが、引率教員を増やすことは無理だったので、同時期に新たに訪米研修団を派遣するのを諦め、アジアで英語圏の国での研修が考えられ、オーストラリア研修と決まった。実施時期については夏休みとし、主に2年生30名を対象に、終業式直後の3週間で行うことに決定。訪米と同様、キリスト教信仰

と文化・伝統に学ぶことが強調されたが、現地中学高校に体験入学し、毎日通学が課され、当初は受け入れ校が頻繁に変わり、米国南部ほどキリスト教の影響が強くなかったので、日常で教会と関わることは少なかった。しかもクリスチャンホストファミリーは少なかった。

第1回訪豪：1988年7月21日から8月10日までの21日間で実施された。参加生徒数30名。研修地はクイーンズランド州ブリスベーン市郊外。引き受け校は英国国教会系の男子校サウスポート高校。毎日午前中3時間、英会話の指導があり、午後は市内見学、クイーンズランド大学訪問、羊毛、ミルク工場見学等行った。ブリスベーン到着前にメルボルン、シドニーの市内見学をした。引率2名、団長は内海敬三教諭。



第1回訪豪研修

第8回訪米：1989年3月、テキサス州ダラスで実施。今回もフェナー先生のお世話になる。引き受け教会はリチャードソンハイツ、カサヴェー、リチャードソン第一バプテストの3教会であった。引率3名。団長吉村利幸教諭。

第2回訪豪：1989年8月実施。台風の中での出発であった。引き受け校はシドニーからバスで1時間程行った広い林の中に位置するノーザンビーチ校。同校は幼稚園、小中高校を持つ教育機関。既成教会と信仰を異にし、公教育に飽き足りないキリスト者が開いた教育機関。建学の精神は聖書に基づく。学校生活は聖書朗読と讃美歌斉唱

に終始した。出欠、授業態度、生徒指導に関しては厳しく、服装、髪型の検査も頻繁に行われた。ちなみに、我々の滞在中に髪を染めた同校生徒が退学を申しつけられたが、このことは同校の指導の厳しさをよく示している。

第9回訪米：研修地はバトンルージュ。体験校はロバート・イー・リーとパークビューバプテスト高校の2校。

第3回訪豪：研修地はクイーンズランド州ブリスベン。体験校は小中高校を併せ持ったカトリック系男子校アイオナカレッジ。

第10回訪米は1991年3月実施の予定であったが、湾岸戦争勃発で出発直前に足止めをくい、取り止め。1990年8月に発生したイラクのクエート侵攻により米国を主とする多国籍軍が91年2月にイラクを制圧、クエートを解放した。紛争時、本校職員会議が招集され、取り止めを決議した。同年2月28日湾岸戦争終結。足止めをくった研修団は保護者と連絡会を開き、研修実現を強く願う旨を職員会議に表明したが、受け入れられなかった。現地窓口になっていたダービーシャイヤー教会の指導者の1人であったフライヤー師に春休みに訪米を希望する生徒だけでも受け入れて欲しいと訴えたが、叶わず、涙を飲んだ。引率になるはずの教員2名は春休みを利用してバージニア州リッチモンド市に陳謝の旅をした。ホストファミリーは一応に理解を示されたが、その後ダービーシャイヤー教会は2度と引き受け教会の名のりを上げてくれなかった。

第4回訪豪：1991年8月、クイーンズランド州ブリスベン研修。バプテスト系の小中学校を併せ持つ、生徒数300ほどの小規模校が受入れ校。シンガポール、メルボルンを経由して研修地に入り、帰路ケアンズに立ち寄った。

第11回¹訪米：1992年3月、テキサス州ラフキン市で研修。引き受け教会はラフキン第一バプテスト教会。

第5回訪豪：1992年7月末から約2週間。クイーンズランド州ケアンズ市で研修。

1 両研修旅行とも回数については数え方が違うため、『遙けきかな』（西南学院高等学校出版）に報告された回数と異なる。

第12回訪米：1993年3月、バージニア州リッチモンド市とハンプトン市の2班に分かれて研修。

第6回訪豪：1993年8月、クイーンズランド州ブリスベンマリストカレッジ・アッシュグロヴ校で体験入学。

第13回訪米：1994年テキサス州ヒューストン市、ラフキン市で研修。今回もフェナー先生のご厚意に甘える。引率2名は元宣教師のハロウエーご夫妻宅でホームステイ。

第7回訪豪：1994年8月、2週間。研修地は西オーストラリア州パース市。受け入れ校はトリニティカレッジ。マレーシア・イポー市YMCAで現地の高校生と交流。引率2名。団長早川寛教諭。

第14回訪米：1995年3月14日から4月1日の約2週間。研修地はバージニア州リッチモンド市。引率3名（男性2、女性1）。吉村利幸教諭が団長。参加生徒40名（男子15名、女子25名）。1994年に本校は大きく変化した。創立から77年間の男子教育に終止符を打ち、男女共学に移行した。初めて男女混合グループを束ねる2名の男性引率教員は落ち度が無いように特別に注意を払い、無事に研修を終えた。引き受け責任者はビル・マーシュ氏。引き受け教会はチェスターフィールド教会。カナダのトロント市、ナイアガラ瀑布、ボストン市内見学。ボストン交響楽団演奏会に行った者数名。

第8回訪豪：1995年8月、西オーストラリア州パースで2週間実施。参加生徒26名。訪豪研修で初めての男女混合グループ。引率2名。この年は戦後50年の節目の夏に当たった。世界史担当の柴田教諭による事前研修で戦前、戦中、戦後のアジアと日本の関係についてご指導願った。オーストラリア到着前に訪れたシンガポールでは、日本人観光客がほとんど立ち寄らない第二次大戦中に日本軍が侵攻した地点や華僑殺害事件の現場を訪れた。柴田教諭の事前のご指導のおかげで、シンガポール市内見学が実り多かった。引き受け校は創設されて5年ほどのバプテスト系ジュンダラップ中学高等学校。

第15回訪米：1996年3月実施。バージニア州リッチモンド市がホームステイ研修地。引率3名。団長は吉村利幸教諭。主な見学地は南部バプテスト連盟外国伝道局、ナイアガラ瀑布、ボストン市内。

第9回訪豪：1996年8月実施。ホームステイ先は首都キャンベラ。研修センターはオコーナーカレッジ。帰路、シドニーからニュージーランドのキングズカレッジを表敬訪問。同校はキリスト教主義の男女共学校でオークランド市（福岡市の姉妹都市）に位置し、前年の5月に本校を訪問していた。その際、本校生徒20名宅にホームステイ。引率教員英語科2名。団長吉村利幸教諭。

第16回訪米：1997年3月実施。バージニア州リッチモンド市。

第10回訪豪：1997年8月実施。オーストラリアに入る前にタイの首都バンコクへ向かい、文化遺産のアユタヤ遺跡を見学。現地引き受け校はパース市郊外のジュンダラップ。この時初めて内陸に広がる砂漠に座するアボリジニの聖岩エアーズロック（巨大な一枚岩）に登った。引率2名。団長早川寛教諭。

第17回訪米：1998年3月実施。リッチモンドで約20日間の研修。ワシントンDCの Smithsonian 博物館、古都として知られるウィリアムズバーグを訪ねた。また、ボストンでアイスホッケーの試合を観戦。E. B. ドージャー夫人宅を訪問し、西南のルーツやスピリットに触れた。

第11回訪豪研修旅行は1998年8月実施の予定であったが、募集人数30を大幅に割ったので、取りやめた。

第18回訪米：1999年3月実施。リッチモンド市が研修地。現地責任者ビル・マーシュ氏。引率3名。団長吉村利幸教諭。

1999年8月の第12回訪豪研修は再び応募人数に満たず中止。

第19回訪米：2000年3月実施。研修地はバージニア州リッチモンド市。

第13回訪豪：2000年8月に実施。研修地は西オーストラリア州パース市。現地引き受け校はガヴァナースターリング中学高等学校。同校保健体育を担当されていたケヴィン・ピーターソン教諭が本校生の指導をされた。この時もアウトバックと呼ばれる内陸乾燥地帯に広がるエアーズロックに登った。

第20回訪米：2001年3月、バージニア州リッチモンド市で実施。

第14回訪豪：2001年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

第21回訪米中止。2002年3月に実施予定であったが、前年の9月11日に米国で発生した同時多発テロの影響が色濃く残っている状況下での実施は危ぶまれ、取り止めになった。

第15回訪豪：2002年8月実施。西オーストラリア州パース市が研修地。現地引き受け校はガヴァナースターリング校。

第22回訪米中止。昨年と同じ理由で、取り止めになった。

第16回訪豪：2003年8月、西オーストラリア州パース市で実施。引き受け校は前年と変わらず。（この4月にガヴァナースターリング校から生徒約10名が体験入学のため来校、本校生徒宅でホームステイした。7月に米国人高校生10余名ホームステイ。）

第23回訪米：2004年3月実施。今回の研修はそれまでとは性格を異にした。教会ではなく、現地高校に本校生の引き受けを依頼。研修地はカナダ国境に近いミネソタ州アップルバレー市。公立イーストビュー校が引き受け校。日本語担当のローラ・古賀教諭に生徒の研修全般を担当してもらった。

第17回訪豪：2004年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

第24回訪米：2005年3月、ミネソタ州アップルバレー市で実施。公立イーストビュー校が引き受け校。

第18回訪豪：2005年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

第25回訪米：2006年3月、ミネソタ州アップルバレー市にある公立高校イーストビューで実施。研修中、15名がインフルエンザに感染。そのうち7名が病院で手当を受けた。病状が重い2名は団長の土崎愛教諭に付き添われ、数日遅れて帰国。

第19回訪豪：2006年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

第26回訪米（2007年3月実施予定）は募集人数を大幅に割り、取りやめ。

第20回訪豪：2006年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

2007年3月の第27回訪米研修は、応募数が少なく取り止め。

第21回訪豪：2007年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

2009年3月の第28回訪米研修は、応募数が少なく取り止め。

2009年8月、西オーストラリア州パース市で行う予定の第22回訪豪は新型インフルエンザ流行のために中止。代案として、校内で5日程、集中語学研修実施。

第29回訪米：2010年3月、ジョージア州アトランタ市ディケーターで実施。引き受け教会はオークハーストバプテスト教会。引率3名。団長土崎愛教諭。本学院宗教主事リディア・ハンキンス師が本校と現地教会との橋渡しの労をとってくださいました。

第23回訪豪：2010年8月、西オーストラリア州パース市で実施。

以上、訪米訪豪で特に記憶に残った事を交えて第1回研修旅行から順次記した。

◇留学生（体験入学生を含む）受入れ

研修旅行が開始される前の1979年から、留学生を常時、2～5名受け入れてきた。現在に至るまでその数あわせて80を超える。留学生の受け入れ期間は10カ月、約6カ月、数週間に分かれる。留学生は1、2年生のクラスに配属され、本校生徒と机を並べる。日本語授業は留学生室で週6～9時間行われる。日本語担当教師は横尾恵子先生で、先生の指導の下で日本語力を著しくつけた生徒が多い。

留学生の中には母国で高校を卒業後、再来日、日本の大学に入学を許可され、勉学に励んでいる者がいる。また、わが国で職に就いた者もいる。

4、5年前前から福岡市の国際交流課の依頼で、東アジアの中高生の2、3日ほどの

体験入学を許可している。12月中旬の慌ただしい最中、アジア数カ国の行政官や教員に引率された中高生が多数来日し、全国の中学、高校で交流をするが、本校には10名ほどが充てられる。

◇終わりに

冒頭で述べた様に、1980年前後に本校の国際交流が始まって30余年が経過した。交流が始まった頃、年間1,000万人を超える日本人が出国し、400万人を超える外国人が来日していた。その間10年ぐらいは文字通りグローバリズムの開花期であり、それに乗って本校の交流活動も勢いづいた。しかし、1990年代に入ると、バブルがはじけて経済金融不安が到来。それ以後、現在に至るまで景気回復の兆しは見えない。加えて、テロリズム、戦争、感染症、自然災害等が頻発、本校の交流活動にも大きく影響した。

種々の要因が重なり、我が国民の異文化に対する食指が伸びなくなった。特に若者が内向きになり、海外渡航、異文化研究に消極的な傾向が強くなった。こういう状況下で本校研修の取りやめや応募者数の減少が起きた。今後も予断を許さぬ事態が地球規模で再発すると思うが、末長い交流の継続を祈る。

本校の国際交流事業を支援してくださる人、数あまたである。米国南部に点在するバプテスト教会、牧師、役員の方々は日常を犠牲にして本校生のために尽くされた。本学院の退役、現役宣教師の方々は自宅を開放してマナーを指導され、おまけに南部料理を御馳走して支援の手を伸ばされた。その他、学院ゆかりの人々の協力も忘れてはならない。この様に多くの人の助力を抜きにして本校の国際交流は語れないし、また、実現しなかった。衷心より感謝の意を表し、筆を置く。